岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第146号（2011）41－57

コア図式論を用いた中国語動詞「取（qu）」の意味記述

― 異文化理解を射程に入れた語彙指導の可能性に向けて ―

松田　文子　・　黄　　一君*1

溝上他（2009）は，あらゆる言語はその言語の話者の精神生活や文化の投影であり，異なる言語文化における「ことばの意味」は新たな発想や異なった思考世界の捉え方の存在を実感する文化的気づきを提供してくれると指摘している。この点を踏まえ本稿は，異文化理解を射程に入れた語彙指導の可能性を探ることを目的としたものである。具体的には中国語の基本動詞「取（qu）」を事例として，日本語の対訳では捉え難い「取（qu）」で表現される意味世界は，どのようなまとまりとして捉えられるかを探った。考察の結果から，「取（qu）」の意味世界は，日本語の「取る」とは異なり，「必ず対象を主体側に移せるところ（移動元）から対象を利用／活用するために主体側に移すこと」という共通の意味を有しているまとまりとして捉えられることを指摘した。

Keywords：語彙指導，コア・アプローチ，異文化理解，中国語動詞「取（qu）」，日本語動詞「とる」

1．はじめに

近年，国際理解教育・異文化理解教育の呼び声の中で言語に関心が集まっており，外国語教育は「異文化理解」との関連から述べられるようになってきた。例えば丸山（2001：16-23）は，外国語を学ぶことについて概略次のように述べ，言語を媒介とした異文化理解とは単なる外国語の運用技術の習得を意味するのではなく，それを通して相対的な世界認識の仕方を学ぶ方法となりうることであると指摘している。

> ことばは，それが話されている社会にのみ共通な，経験の固有の概念化・構造化であって，外国語を学ぶということはすでに知っている事物や概念の新しい名前を知ることではなく，今までとは全く異なった分析や新しいカテゴリー化の新しい視点を獲得することである（下線筆者）。言語がそれ自身文化であり，例えば中国語を学ぶということは，全く新しいものの見方を身に着けること，すなわち日本語を通して知っている世界を別の観点から読解・把握することである。

また溝上他（2009）も，あらゆる言語はその言語の話者の精神生活や文化の投影であり，異なる言語文化における「ことばの意味」は，新たな発想や異なった思考世界の捉え方の存在を実感する文化的気づきを提供してくれると指摘している。本稿はこのような視点に立ち，異文化理解を射程に入れた語彙指導の可能性を探ることを目的とするものである。

ところで言語は，「言語と文化」，「言語や文化」という呼び方が示すように，一般的には文化とは切り離して考えられる傾向にある。しかしながらソシュール以降，「言語はそれ自身文化である」とする捉え方がすでに一つの見方として定着しており（丸山，2001：13），そこでは，言語はわれわれの直感とは異なり次

[1]岡山大学大学院教育学研究科学校教育学系教育学講座　700－8530　岡山市北区津島中3－1－1
*岡山大学大学院教育学研究科

A Core-schema-Based Semantic Analysis of Chinese Verb “qu”: Exploring the possibility of lexical teaching with intercultural understanding

Fumiko MATSUDA and Yijun HUANG*
Department of School Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama city 700-8530
*Graduate School of Education (Master's Course), Okayama University

のように考えられている。すなわち，日常生活のレベルでわれわれがもっている素朴な言語観は，言語とは「思考や感情の伝達の手段・道具」であるということであり，これがわれわれの言語についてのごく一般的な見方であろう。これに対し，ソシュール以降の言語観では，言語は単にわれわれの「思考や感情の表現の手段」というようなものではなく，世界（現象・事態・状況）を切り分ける機能，すなわち≪分節機能≫を担っているとする。そして，われわれはそれぞれの言語文化の分節の仕方に則して言語を用い，それぞれの文化で用いられる言語によって世界を認識していると捉える（池上，1989）。

本稿は，異文化理解を射程に入れた語彙指導の可能性に向けての基礎研究としてこの≪分節機能≫に着目し，異なる言語文化における≪分節機能≫の違いを具体的にはどのように記述・説明すれば分かりやすいかを中国語基本動詞「取（qu）」を事例として探究するものである。ここで基本動詞[1]を取り上げたのは，各言語文化において世界をどのように認識するかの重要な一端が動詞に現れており，中でも広範な状況を描写する多義性の高い基本動詞の考察は，文化を捉える好事例であると考えたからである。

2．理論的背景：ことばの≪分節機能≫

上述したように，ことばに≪分節機能≫があるとしたのはソシュールである。原資料に基づきながらソシュールを紹介している丸山（2001）によれば，ソシュールは「記号とは何か」という問いから出発して「言語記号論」[2]を提唱した。「言語記号論」では，ことばによって世界が切り分けられている（＝分節されている）とする「言語の対象創出性」の考えをとる。この考えは，「ことばとはモノに貼りつけられたラベル，あるいは名前」[3]とするいわゆる「言語命名論」もしくは「言語衣裳観」（ソシュールの用語では「言語名称目録観」）と呼ばれるものを否定するものである。換言すれば，世界はあらかじめ切り分けられていてそれに名前をつけるというのではなく，以下の引用（丸山，1981：120）に見られるように，現実世界はことばによって認識されると考えるのである。そしてその切り分け方は恣意的であり，それぞれの言語文化によって異なっている。

> ソシュール以前は，コトバは表現でしかなく，既に言語以前からカテゴリー化されている事物や，言語以前から存在する純粋概念を指し示す道具と考えられていたが，ソシュール以降の考え方では，コトバは表現であると同時に意味であり，これが逆に，それ自体は混沌たるカオスの如き連続体に反映して，現実を非連続化し（切り分け），概念化することになる。

「言語記号論」では，言語記号（＝ことば）をシニフィアン（記号表現，表現）とシニフィエ（記号内容，意味・概念）[4]の二つの面を兼ね備えたものであると捉える（図１）。そしてシニフィアンとシニフィエの不分離性は，一枚の紙の表と裏のような関係にあるとされる（丸山，1981：128）。

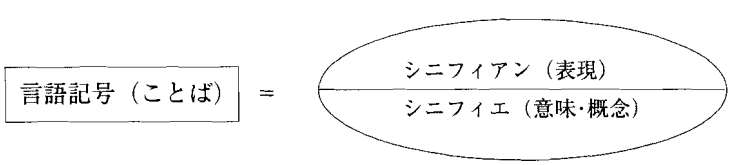

図１　言語記号の「表現」と「意味･概念」（出典：丸山，2001：100）

この点を踏まえ佐藤（1996）は，この≪分節機能≫と現実世界との関係を次のように図示している[5]。

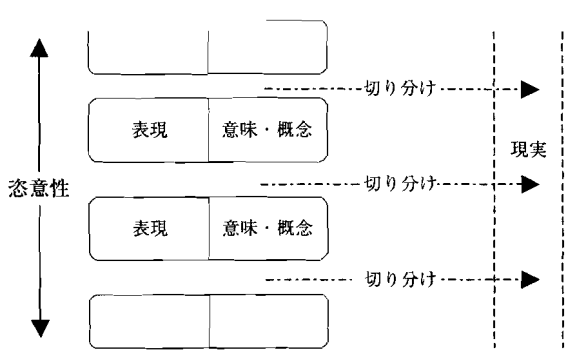

図２　ソシュール風の「言語記号論」の図式（出典：佐藤，1996：104）

以上が言語のもつ≪分節機能≫の概略である。ここで留意しておきたいことは，現実世界の切り分け方は恣意的であり，場合によっては個人間でも異なることがあるが（ここに“ことばの揺れ”が生じる），「言語[6]は一つの社会制度」（丸山，2001：65）であり，一言語共同体に属する個人は，概ね，好むと好まざるに関わらず，当該言語文化の切り分け方を共有しているということである。

この点を本稿の主題に引きつけて考えれば，「一つの社会制度」である言語における分節の仕方，すなわち一つの言語記号（表現＋意味･概念）で分節して表現される意味世界（以下,「ことばの意味空間[7]」と記す）のあり様は，その言語社会固有の世界の捉え方，ものの見方を反映したものであり，その理解は「異文化理解」そのものであることが分かる。

3．考察対象

上述したように，本稿では基本動詞の具体事例として中国語動詞「取（qu)」を取り上げ，「取（qu)」の意味世界を日本語動詞「とる」との異同から考察する。「取（qu)」は，多義性の高い基本動詞であり，「取（qu)」の意味・概念の広がりと「とる」のそれとは大きく異なっている。例えば，「取（qu)」は，「取雨傘（傘を手にとる），「取悦（機嫌をとる）」，取暖（暖をとる），取谨慎态度（慎重な態度をとる），取景于桂林山水（桂林の山水に題材をとる）」など，多くの場合日本語動詞「とる」と対応するが，「眼鏡をとる（→摘（zhai），海で魚をとる（→捕（bu），席をとる（→占（zhan）），宿をとる（→订（ding）），船の舵をとる（→掌（zhang）」などは「取（qu)」とは対応しない。その一方で，「取款（（銀行で）お金を下ろす），取名（名前をつける），取乐（楽しむ），取祸（災害に遭う）」などは「取（qu)」で表現される。

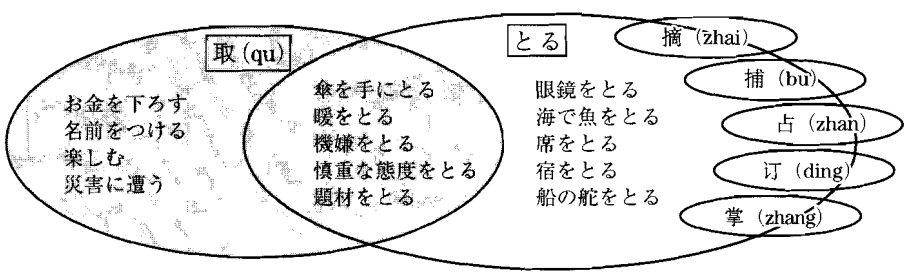

図３　「取（qu)」と日本語の対訳

このように，「取（qu)」で切り取っている意味・概念の内部構造，すなわちことばの意味空間が「とる」と大きく異なることは，辞典の記述からもすぐに確認できる。しかし現行の辞典の記述を通して個々の用法／用例に触れるだけで，「取（qu)」の意味空間を包括的に捉えるができるであろうか。否である。現行の辞典の記述は，個々の用法／用例を対訳し，それぞれをバラバラに，いわば「島」として記述しているにすぎない。そこで本稿では，以上に述べてきたような視点から，異文化理解を射程に入れた語彙指導の可能性に向けての具体的な研究課題を次のように設定することにする。

研究課題：中国語基本動詞「取（qu)」の意味空間は，どのように記述・説明すれば分かりやすいか。
　　またそれは日本語基本動詞「とる」とどのように異なるか。

4．意味分析・意味記述の学問的立場

これまでことばの意味空間は，現行の辞典の記述に見られるように，その意味・用法を羅列して示すというのが一般的であった。これに対し近年認知意味論では，ことばの意味空間をプロトタイプ語義（典型的な用法）から放射状に広がる意味拡張として説明する方法が提案された（図４）。

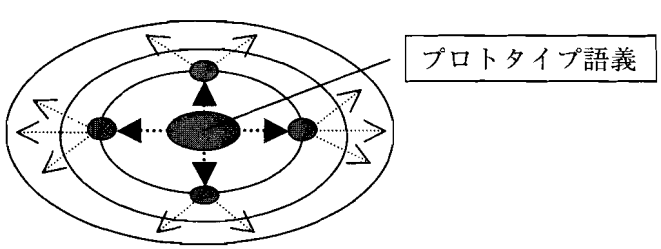

図４　比喩（類似性・近接性）による意味拡張

この方法をここでは便宜上，プロトタイプ理論による「プロトタイプ・アプローチ」と呼ぶ。プロトタイプ・アプローチでは，意味空間内の多義用法を何らかのつながりのあるものとして捉えようとしており，従来の辞典の意味の羅列による記述を一歩進めたものである。ことばの意味空間は“通時的”には，メタファ（隠喩）＝類似性，メトニミー（喚喩）＝近接性，シネクドキー（提喩）という三つの比喩に動機づけられて変容・拡張をしてきたとされるが，プロトタイプ・アプローチは，これらの比喩（類似性・近接性）によって“共時的な”意味空間内のつながりを説明しようとするものである。

・メタファ（隠喩）＝二つの意味・概念の何らかの類似性に基づいて，一方の意味・概念を表す表現形式を用いて，他方の意味・概念を表すという比喩。
・メトニミー（喚喩）＝二つの事物の外界における隣接性，さらには広く二つの意味・概念の思考上・概念上の関連性に基づいて，一方の意味・概念を表す表現形式を用いて，他方の意味・概念を表すという比喩。
・シネクドキー（提喩）＝一般的な意味・概念をもつ表現形式を用いて，より特徴の意味・概念を表す（あるいはその逆）という比喩。（籾山，2002：62-84）

しかしながら，上図３からも明らかなように，何を類似性・近接性と考えるかは言語文化によって異なっている。中国語母語話者は「傘を手にとる」ことと「銀行でお金を下ろす」ことを同じ動詞「取（qu）」で表すが，その類似性を日本語母語話者が認識するのは難しい。異文化理解を射程に入れた語彙教育への応用を目的として当該のことばの意味空間を記述するためには，なぜ，これらの行為は類似性をもつとみなされるのか，言いかえればどのような認識のもとに「取（qu）」を用いるのかを示すことが求められる。この点において類似性・近接性による意味拡張として説明するプロトタイプ・アプローチでは十分ではないと言えるであろう。

認知意味論のもう一つの説明理論として，コア・アプローチが提唱されている。ここでいう「コア」とは，柴田他（1976）の「ことばの核」，Bolinger（1977）の“single overarching meaning”に相当するものである（田中，1986：32）が，具体例を挙げると，英語の前置詞“on”は，“the apple on the table”（テーブルの上のりんご），“the fly on the ceiling”（天井に止まっているハエ），“a crack on the wall”（壁の表面にできたひび）ように用いられ，“on”は水平・垂直方向を問わず「接触関係」を表していると説明できる。このように複数の用法のそれぞれの意味・概念を一つに取りまとめた包括概念が「コア」である。

コア理論では，ことばの意味空間は様々なレベルの概念の集積であり，多様なレベルの意味・概念が雑多に入っている立体構造をなすものとして捉える（田中，1990：松田，2002，2004）。例えば日本語動詞「とる」には，「帽子をとって，あいさつする」「金メダルをとる」「船の舵をとる」などの具体的な用例から表象されるレベルの概念（概念レベル１），「除去する」「獲得する」「操作する」など辞書の記述に見られるようにそれらをいくつかに取りまとめた用法レベルの概念（概念レベル２），また，これらすべて取りまとめた抽象度の高いコア概念（概念レベル３）などである（図５参照）。

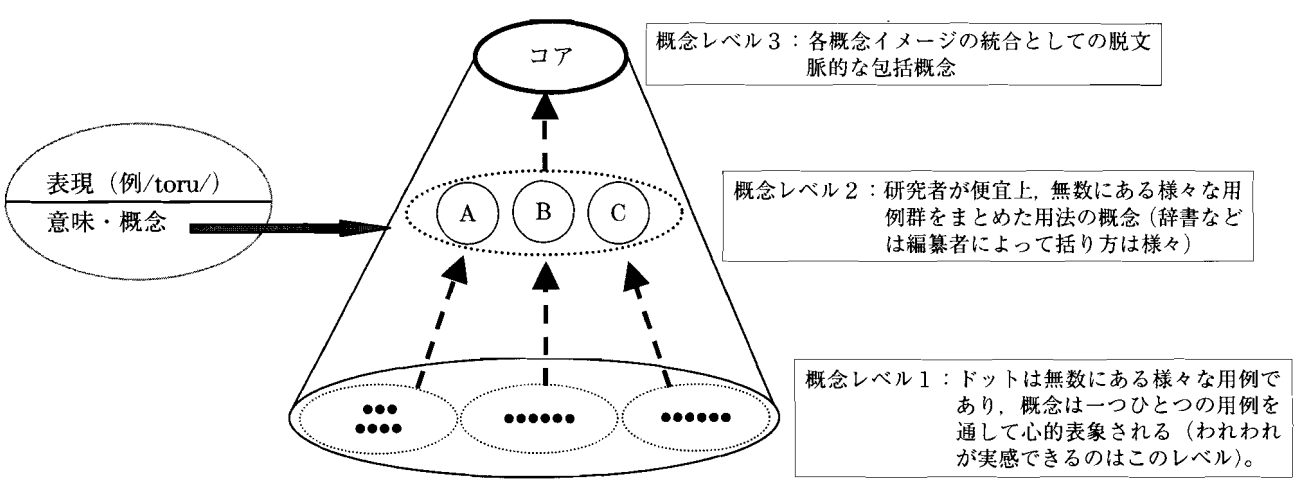

図５　ある表現に対応する「意味・概念」の意味空間

コア・アプローチでは，意味空間内の多様な用法を「コア」との類似性によって示すという方法をとる。つまり，当該の言語文化では多様な用法をなぜ類似性・近接性のあるものとしてみなすのかをコアによって示そうとするのである。

本稿では，目的に照らし合わせて意味分析・意味記述に対する学問的立場をコア・アプローチ（田中，2003：2004）に置くことにする。

コア・アプローチにおけるコアは大別して2つの方法によって表される（田中他，2003)。

(1) 動作を表す基本動詞（take, run, put, break etc.／ひく，かける，とるなど）や空間を表す前置詞（in, on, to, up, over etc.）などは多義性が高いため，コアは抽象的な認知図式を描いて表す。

(2) 心理動詞，行為動詞など認知図式で表すことが難しい語に対しては，よく使われる基本義や語源情報などをまとに言語記述によって表す。

(1)の方法は，コアを図式表象することから特に「コア図式論」と呼ばれ，図式表象された認知図式は「コア図式」と呼ばれている。本稿では中国語基本動詞「取（qu)」を対象とするため，(1)の「コア図式論」を援用することとする。

5．「コア図式論」による意味記述の方法

上で述べた“on”の例は比較的容易にコアに辿りつけるが，「とる」など多義性の高いことばのコアをどのように捉えるかは母語話者であっても容易ではない。それは通常，意識することがないからである。従って，コア図式論では，まず研究者が多くの用例・用法の分析と統合を繰り返すことによってコアXを仮想し（図6，左側)，それを可視的にコア図式として提示する。次に，文脈を加えることによって実現する各用法のイメージをそのコア図式のバリエーション（以下，イメージ図式）として描き，各用法とコア図式との類似性を示して，「一つの形（＝表現)」には一つのコアが作用していることを示すという手法をとる（図6参照)。

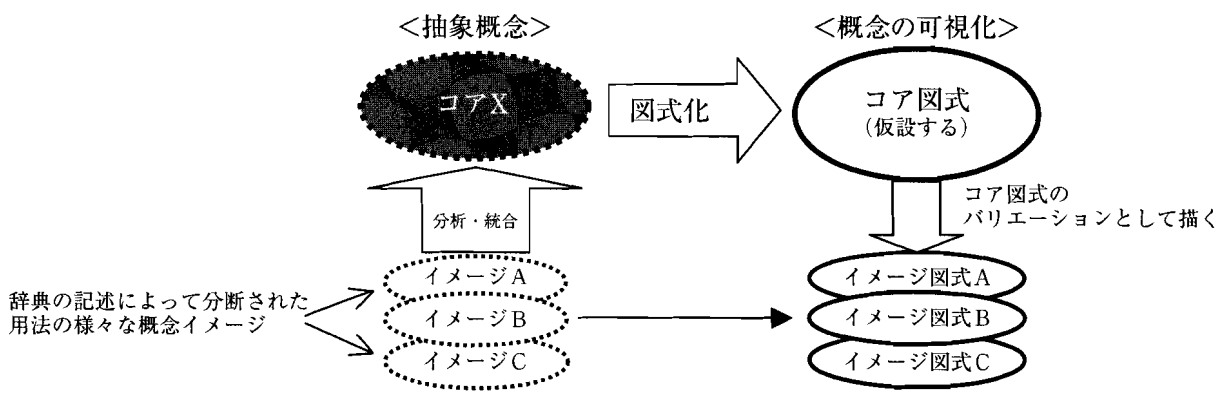

図6　コア図式の仮設とイメージ図式（松田・白石，2007)

6．中国語動詞「取（qu)」の意味空間分析

それでは，中国語動詞「取（qu)」の意味空間の包括概念であるコア及びコア図式はどのようなものであろうか。本節では，この点について考察する。

6-1 「取（qu)」の用例

中国語動詞「取（qu)」は，以下のような文脈で用いられる。以下の用例43例は，現行の漢語辞書である『現代汉语大词典』を主な出典としているが，できるだけ多くの用例を収集するため，中日辞書である『現代汉语词典』，『中国語大辞典』，『中国語動詞活用辞典』，『中日辞典』なども参考にし，また，作例も用例として追加している。それぞれの出典は，用例末の＜　＞内に略語で記し，筆者の作例や訳文は，＜作例＞＜筆者訳＞と記す。

『辞書名』	……	＜略語＞
『現代汉语大词典』	……	＜汉语大＞
『現代汉语词典』	……	＜汉语＞
『中国語大辞典』	……	＜大辞典＞
『中国語動詞活用辞典』	……	＜活用辞典＞
『中日辞典』	……	＜中日＞

表１　「取（qu）」の用例

1．拿（とる）

(1) “竹均，我　的　行李　　你　　怎么　　敢　　随便　　就　　取　　出来　了。”……<汉语大>
〈竹均〉〈私〉〈の〉〈荷物〉〈あなた〉〈どうして〉〈あえて〉〈勝手に〉〈既に〉〈とる〉〈出す〉Asp
竹均さん，どうして私の手荷物を勝手にとり出したの。……<筆者訳>

(2) (他)　进　　屋　　取　　了　　两　　三　　把　　雨伞。……<大辞典>
〈彼〉〈入る〉〈部屋〉〈とる〉Asp〈二〉〈三〉〈本〉　〈傘〉
（彼は）部屋に入って洋傘を２，３本手に取った。……<大辞典>

(3)　(小王)　　去　　车站　　取　　行李。……<活用辞典>
〈王さん〉〈行く〉〈駅〉〈とる〉〈荷物〉
（王さんは）駅へ荷物を取りに行く。……<活用辞典>

(4)　他　　去　　仓库　　取　　鱼。……<作例>
〈彼〉　〈行く〉〈倉庫〉〈とる〉〈魚〉
彼は魚をとりに倉庫へ行く。……<筆者訳>

(5)　取　　样　　检查。……<中日>
〈とる〉〈見本〉〈検査する〉
見本を抜き取って検査する。……<中日>

(6)　(我)　　去　　银行　　取　　点　　钱。……<活用辞典>
〈わたし〉〈行く〉〈銀行〉〈おろす〉〈少し〉〈お金〉
（わたしは）銀行へお金を少し下ろしに行く。……<活用辞典>

(7)　我　　考　　过　了，明天　去　　取　　驾照。……<作例>
〈わたし〉〈受験する〉〈通る〉Asp〈明日〉〈行く〉〈とる〉〈運転免許証〉
わたしは試験に合格したから，明日運転免許証をとりに行く。……<筆者訳>

(8)　到　　洗衣店　　去　　取　衣服。……<中日>
〈着く〉〈クリーニング店〉〈行く〉〈とる〉〈服〉
クリーニング店に服を取りに行く。……<中日>

(9)　把　　画　　从　　墙　上　　取　　下来。……<中日>
〈…を〉〈絵〉〈…から〉〈壁〉〈上〉〈とる〉〈下げて来る〉
壁から絵を取り外す。……<中日>

(10)　取　　之　　于　　民，　用　　之　　于　　民。……<中日>
〈とる〉〈指示代詞〉〈から〉〈民衆〉〈用いる〉〈指示代詞〉〈から〉〈民衆〉
人民から取ったものは，人民のために使う。……<中日>

2．招致（招く）

(11)　因　　称颂　　海瑞　和　东林党　　而　　取　　祸。……<大辞典>
〈…のために〉〈称賛する〉〈海瑞〉〈と〉〈東林党〉〈だから…〉〈とる〉〈災禍〉
海瑞と東林党を称賛したために災禍に遭った。……<大辞典>

(12)　他　的　这个　　下场，　　说来　　乃是　　咎　由　自　取。……<中日>
〈彼〉〈の〉〈この〉〈成れの果て〉〈言って見れば〉〈…は…である〉〈罪〉〈…から〉〈自分〉〈とる〉
彼のこの成れの果ては，言うなれば身から出たさびだ。……<中日>

(13)　(他　这样　　做)　　简直　　是　　自　　取　　灭亡。……<中日>
〈彼〉〈このように〉〈する〉〈まるで〉〈…は…である〉〈自ら〉〈とる〉〈滅亡〉
（彼がこのようなやり方をするのは）まるで自ら滅亡を招くようなものだ。……<中日>

3．得到（得る）

(14)　围　　坐　　在　　火炉　　旁边　取　　暖。……<大辞典>
〈囲む〉〈座る〉〈（場所）で〉〈ストーブ〉〈そば〉〈とる〉〈暖〉
ストーブのそばにくるま座になって暖をとる。……<大辞典>

(15)　按　　劳　　取　　酬。……<汉语大>
〈…に基づき〉〈労働（量）〉〈とる〉〈報酬〉
労働に応じて給料をもらう。……<筆者訳>

(16)　(统治者)　　在　　农民　身　上　　加倍　　取　　偿。……<大辞典>
〈統治者〉〈…の範囲に〉〈農民〉〈体〉〈上〉〈倍増する〉〈とる〉〈賠償〉
（統治者は）農民から倍の補償を取る。……<大辞典>

(17)　作家　　在　　创作　　一部　作品　时，其　动机　　决不是　　为了
〈作家〉〈…している〉〈創作する〉〈一部〉〈作品〉〈時〉〈その〉〈動機〉〈決して…ではない〉〈…のため〉
　　新鲜　　应时，　　投　　其　　所好，　　以　　希　　取　　宠　的。…<汉语大>
〈目新しくする〉〈時節に合う〉〈あわせる〉〈（読者）の〉〈好み〉〈…しようとする〉〈希望〉〈とる〉〈寵愛〉〈の〉
作家が作品を創作する動機は，決して読者の好みを考えて，人気をとろうとしたものではない。…<筆者訳>

(18)　取　　信　　于　　人。……<中日>
〈とる〉〈信用〉〈…から〉〈人〉
人の信用を得る。……<中日>

(19) 明天 足球 比赛，辽宁队 对 上海队，
〈明日〉〈サッカー〉〈試合〉〈遼寧チーム〉〈…に対する〉〈上海チーム〉
你 看 谁 能 取 胜？ ……＜汉语大＞
〈あなた〉〈思う〉〈誰〉〈可能〉〈得る〉〈勝利〉
明日のサッカーの試合は遼寧チーム対上海チームだけど，どちらが勝つと思うか。……＜筆者訳＞

(20) 他们 实力 雄厚，和 他们 比赛 很 难 取 胜。……＜大辞典＞
〈彼ら〉〈実力〉〈十分である〉〈と〉〈彼ら〉〈試合〉〈とても〉〈難しい〉〈得る〉〈勝利〉
彼らは実力が十分あるから，彼らと試合をしても勝利を得ることは難しい。……＜大辞典＞

4．采用，选用（選びとる）

(21) 这件 事 你 打算 取 什么 态度。……＜活用辞典＞
〈この〉〈事〉〈あなた〉〈するつもりだ〉〈とる〉〈何〉〈態度〉
この事で，あなたはどんな態度をとるつもりですか。……＜活用辞典＞

(22) 给 孩子 取 个 名字。……＜大辞典＞
〈あげる〉〈子ども〉〈とる〉〈一つ〉〈名前〉
子どもに名前をつける。……＜大辞典＞

(23) “我 爹娘 生 下 我，取 名 叫 盼水。”……＜汉语大＞
〈わたし〉〈父母〉〈生む〉〈下〉〈わたし〉〈つける〉〈名〉〈呼ぶ〉〈盼水（名前）〉
「わたしを生んでくれた両親は，‘盼水’という名をつけてくれた。」……＜筆者訳＞

(24) 衣服 的 长短 可 照 老样 取 齐。……＜大辞典＞
〈衣服〉〈の〉〈寸法〉〈…していい〉〈…の通りに〉〈古い型〉〈とる〉〈同じ高さになる〉
服の寸法は古い型に合わせて結構です。……＜大辞典＞

(25) 下午 三时 我们 在 门 口 取 齐，一块 出发。……＜大辞典＞
〈午後〉〈三時〉〈わたし達〉〈（場所）で〉〈ドア〉〈入口〉〈とる〉〈集合する〉〈一緒に〉〈出発する〉
午後３時我々は入り口に集合して，一緒に出発する。……＜大辞典＞

(26) 聪明 的 人 更 会 取 巧。……＜大辞典＞
〈聡明〉〈の〉〈人〉〈もっと〉〈できる〉〈とる〉〈巧みであること〉
利口な人ならもっと要領よくやるだろう。……＜大辞典＞

(27) 新 老 干部 互相 学习，互相 帮助，取 长 补
〈新しい〉〈古い〉〈幹部〉〈相互〉〈学習する〉〈相互〉〈助ける〉〈とる〉〈（相手の）長所〉〈補う〉
短，共同 进步。……＜大辞典＞
〈（自分の）短所〉〈共同で〉〈進歩する〉
新旧幹部は互いに学び，互いに助け合って長所を取り入れて進歩する。……＜大辞典＞

(28) 这本 小说 取 材 于 钢铁工人 的 生活。……＜大辞典＞
〈この〉〈小説〉〈とる〉〈材料〉〈…から〉〈鉄鋼労働者〉〈の〉〈生活〉
この小説は鉄鋼労働者の生活から題材をとった。……＜大辞典＞

(29) 取 材 于 历史 的 小说。……＜大辞典＞
〈とる〉〈材料〉〈…から〉〈歴史〉〈の〉〈小説〉
歴史を題材にした小説。……＜大辞典＞

(30) 取 道 武汉，前往 广州。……＜大辞典＞
〈とる〉〈経由の道〉〈武漢〉〈…に向かっていく〉〈広州〉
武漢を経由して広州に行く。……＜大辞典＞

(31) 我 先 率领 一组 同志，取 道 皖北，千里 步行，
〈わたし〉〈先に〉〈率いる〉〈一組み〉〈同志〉，〈とる〉〈経由の道〉〈安徽省北部〉，〈千里〉〈歩いて行く〉
先 到 武汉。……＜汉语大＞
〈先に〉〈着く〉〈武漢〉
私は先に一組の同志を率いて，歩いて皖北を経由して武漢に行く。……＜筆者訳＞

(32) 今天 从 你们 这 取 了 不少 经，太 感谢 了。……＜大辞典＞
〈今日〉〈…から〉〈あなた達〉〈ここ〉〈とる〉Asp〈たくさん〉〈経験〉，〈とても〉〈感謝する〉Asp
今日はあなた達からいろいろ学ぶことができて，本当にありがとうございました。……＜大辞典＞

(33) 到 先进 单位 取 经。……＜中日＞
〈行く〉〈先進的な〉〈部門〉〈とる〉〈経験〉
先進的な部門へ行って良い経験を学んでくる。……＜中日＞

(34) 这 幅 画 取 景 于 桂林山水。……＜汉语大＞
〈この〉〈枚〉〈絵〉〈とる〉〈景色〉〈…から〉〈桂林の山水〉……
この絵は，桂林の山水に題材をとったものだ。……＜筆者訳＞

(35) 在 这个 问题上 要 取 谨慎 态度。……＜中日＞
〈…ところで〉〈この〉〈問題上〉〈要る〉〈とる〉〈慎重な〉〈態度〉
この問題に対しては慎重な態度をとらなければならない。……＜中日＞

(36) 不无 可 取 之 处。……＜中日＞
〈多少はある〉〈…していい〉〈とる〉〈の〉〈ところ〉

多少取り柄はある。……<中日>
5．取妻（嫁を取る）
(37)　除　了　给　儿子　取　亲　那一天，这种　舒服　简直　不曾　体会过。..<汉语>
〈…を除いて〉Asp〈あげる〉〈息子〉〈とる〉〈嫁〉〈あの日〉，〈この〉〈快さ〉〈まったく〉〈かつてない〉〈体験〉
これほど喜びを感じたのは，息子に嫁をもらった日以来だ。……<筆者訳>
6．寻求（探し求める）
(38)　下　棋　取　乐。……<大辞典>
〈する〉〈将棋や囲碁〉〈とる〉〈楽しみ〉
将棋をして楽しむ。……<大辞典>
(39)　大家　坐　在　一起　说　笑话　取　乐。……<汉语大>
〈みんな〉〈座る〉〈…にいる〉〈一緒に〉〈話す〉〈冗談〉〈とる〉〈楽しみ〉
みんなで一緒に座って，冗談を言って楽しむ。……<筆者訳>
(40)　别　拿　我　取　乐。……<汉语>
〈…するな〉〈…を〉〈わたし〉〈とる〉〈楽しみ〉
私のことを材料（魚）にして，楽しむのは止めてください。……<筆者訳>
(41)　犯人　如　患　重病，　可以　准许　取
〈犯人〉〈もし…たら〉〈（病気）をかかる〉〈重病〉，〈…してもいい〉〈許可する〉〈とる〉
保　回家　医治。……<大辞典>
〈誰かに保証人になってもらうこと〉〈家に帰る〉〈治療する〉
犯人がもし重病にかかったら，保証人をたて家で治療することが許される。……<大辞典>
(42)　叫　他　三　人　每　人　拿出　一万　块　洋钱　充作　罚款，就　将
〈呼ぶ〉〈彼〉〈三〉〈人〉〈毎〉〈人〉〈取り出す〉〈一万〉〈＝元〉〈銀幣〉〈…になる〉〈罰金〉〈就く〉〈する〉
他们　取　保　出去。……<大辞典>
〈彼ら〉〈とる〉〈保証〉〈出て行く〉
彼ら３人にそれぞれ１万元ずつ罰金を出させ，（それを保証にとって）保釈しろ。……<大辞典>
(43)　广泛　取　证。……<中日>
〈範囲広く〉〈とる〉〈証拠〉
広く証拠を集める。……<中日>

6-2　中国語動詞「取（qu）」のコアおよびコア図式

ここでは，表１に示した43例をもとに中国語動詞「取（qu）」のコアおよびコア図式を抽出することを試みる。その際，抽出の手がかりとして，「取（qu）」を用いると不自然になる例や「取（qu）」とその類義語とのニュアンスの差異にも着目したい。

まず，１つ目の使用条件として次の例を見てみたい。

(1)　把画从墙上取下　<表１-(9)再掲>
〈壁から絵を取り外す。〉
(2)'　把画从墙上拿下来。　<作例>
〈壁から絵を取り外す。〉

(1)と(2)'を日本語に訳すと，どちらも「壁から絵を取り外す。」と訳される。しかし中国語において両者の意味は異なる。(1)の「取下来」は，壁の絵を取り外して自分側にもってくるという意味が含意されるのに対し，(2)'の「拿下来」は，壁の絵を取り外した後に自分のところにもってくるかどうかは含意されない。別の場所に置くことも考えられる。このことから，「対象を主体側に移す」ことが「取（qu）」を用いる際の１つ目の条件となっていると仮定できる。２つ目の使用条件として次の例を挙げてみよう。

(3)　他进屋取了两三把雨伞。　<表１-(2)再掲>
〈彼は部屋に入って傘を２本とってきた。〉
(3)'　＊取了两三把雨伞，扔进垃圾箱。　（＊は非文を表す。同様）　<非文>
〈＊傘２，３本をとって，ゴミ箱に入れた。〉
(4)　今天从你们这取了不少经，太感谢了。　<表１-(32)再掲>
〈今日はあなた達からいろいろ学ぶことができて，本当にありがとうございました。〉
(4)'　今天从你们这学了不少，太感谢了。　<作例>
〈今日はあなた達からいろいろ学ぶことができて，本当にありがとうございました。〉

(3)は，先行する事柄（例えば，雨が降る恐れがある）があるため，対象である「雨傘」活用することが含意されている。そのため，「(3)'＊取了两三把雨伞，扔进垃圾箱」（＊傘２，３本をとって，ゴミ箱に入れた。）

という文脈は考えがたい。この例は，「拿了两三把雨伞，扔进垃圾箱」のように，「拿（na)」を用いると自然になる。また(4)は，相手からいろいろなことを学ばせてもらうだけでなく，それを生かすということが含意されている。つまり，「取（qu)」を使うことよりそれを生かすために積極的に学びに行くという意味となる。この点は(4)'と比較してみると，分かりやすい。この文脈における「学（xue)」は，相手から良いことを学んだことしか表さない。これらの例から，「取（qu)」は，対象を主体側に移すのだけではなく，移した後にその対象を利用／活用することが含意されていると仮定できる。つまり，これらの文脈における「取(qu)」と「学（xue)」の違いは，「取（qu)」が学んだ後，それを生かすというニュアンスを積極的に伝えているというという点にある。3つ目の使用条件として，次の例を挙げてみたい。

(5)　他去仓库取鱼。　＜表1-(4)再掲＞

〈彼は魚をとりに倉庫へ行く。〉

(5)'　＊他去海里取鱼。　＜非文＞

〈彼は魚をとりに海へ行く。〉

(5)は自然であるが，(5)'は不自然である。(5)と(5)'の違いは，(5)は倉庫に魚があり，それを「必ず手に入れることができる」ことが前提になっているのに対し，(5)'は海へ行っても魚がとれない可能性があり，「必ず手に入れることができる」とは言えない点である。因みに，(5)'の状況では「捕魚」となる。

(6)　我考过了，明天去取驾照。　＜表1-(7)再掲＞

〈私は試験に合格したから，明日運転免許証をとりに行く。〉

(6)'　＊买车之前，我想先去取张驾照　＜非文＞

〈私は車を買う前に運転免許をとっておきたい。〉

また，(6)は試験に合格して運転免許センターへ行けば必ず運転免許証を手に入れることができる状況であるのに対し，(6)'はまだ試験を受けていないため，運転免許証を手に入れられるかどうかは分らない。後者の場合「取（qu)」を用いることはできず，「考（kao)」を用いる。このことから，「取（qu)」は，「対象は必ず主体側に移せる状況にあるもの」ということが一つの使用条件となって用いられるということが仮定される。この点は，上述の日本語動詞「とる」と大きく異なっている点である。

以上の3つの使用条件を踏まえ，本稿では「取（qu)」のコアおよびそのコア図式を下図のように表すことにする。

「取（qu)」のコア＝「必ず対象を主体側に移せるところ（移動元)」から，対象を利用／活用するために「主体側」に移すこと。

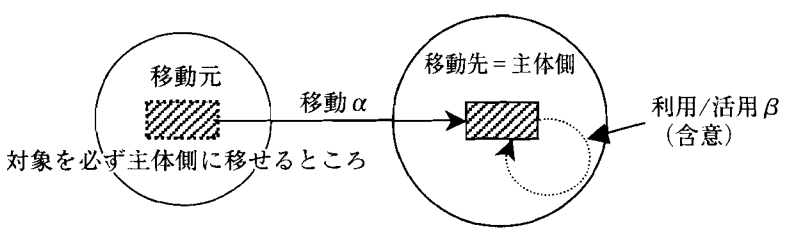

図7　「取（qu)」のコア図式

① 「移動元」は，対象（網がけ四角）の元あるところであり，「取（qu)」の「移動元」は「対象を必ず主体側に移せるところ／移すことに困難を伴わないところ」である。
② 「移動α」とは，何らかの手段で「対象を移す」ことである。「何らかの手段」とは「手，行動，心理的な行動など」を表す。
③ 「移動先」は，「主体側」であり対象を扱えるところである。
④ 「利用／活用β」は「取（qu)」に含意され，明示するときは別のことばで表す。

日本語動詞「とる」との大きな違いは，第一に，「移動元」が「必ず対象を主体側に移せるところ」（と主体が認識するところ）であるいう点である。第二に，「とる」における「操作・処理β」は「船の舵／手綱をとる」のように「とる」ということばで表すこともあるが，「取（qu)」における「利用／活用β」は，常に別のことばで表すという点である。

6-3　コア図式による「取（qu）」の用例の説明

図７は「取（qu）」のコアを図式表象したものであり，文脈上の具体的な用法のイメージ図式ではない。それでは，各用法のイメージはコア図式のバリエーションとしてどのように描くことができるだろうか。本節では，「取（qu）」の用法を２用法３項目に取りまとめ，それぞれをこのコア図式からどのように説明できるかを示していきたい。

Ⅰ．対象を主体側に移した後に，利用／活用することが含意される用法

A：対象を「扱えるところ（身近なところ）に移す」ことを表す。

まず，元々自分の領域にある対象を「身近なところに移す」用例を見てみよう。

(1)　我去银行取点钱。　　＜表１-(6)再掲＞

〈わたしは銀行へお金を少し下ろしに行く。〉

(2)　到洗衣店去取衣服。　　＜表１-(8)再掲＞

〈クリーニング店に服を取りに行く。〉

(1)のように，「取（qu）」を用いるためには一つの条件が必要である。それは，銀行に預金があり，通帳と印鑑（あるいはキャッシュカードと暗証番号）を備えていることである。すなわち主体は対象を必ず移せるところから主体側にお金を移すことを「取（qu）」で表している。また身近なところに移した「お金」はその後利用／活用されることが含意される。同様に(2)では，「取（qu）」を用いているので，「服」はクリーニング店にある他人の服ではなく，店に預けた服であることが分かる。つまり，この「服」は必ずもって帰れるものであり，また主体がその服を「身近なところ」に移した後，使うことが含意されている。このことをイメージ図式に描けば，図８のようになる。

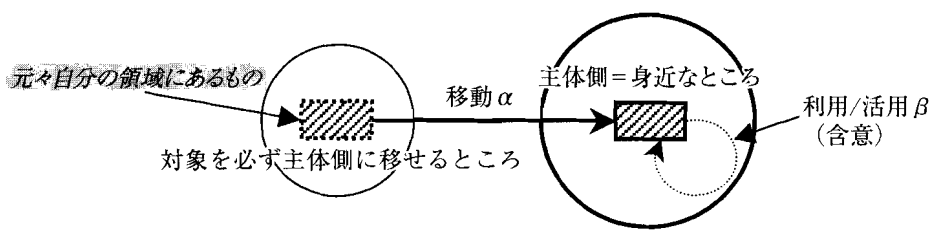

図８　(1)(2)のイメージ図式

「対象を必ず主体側に移せるところ／移すことに困難を伴わないところ」というのは，対象が元々主体のものである場合はもちろんのこと，人のものであっても許可を得ている場合も可能である。また主体が勝手に対象を移せると思い込んでいる場合もある。例えば(3)における竹均さんは，先生のお伴をしているなど先生の手荷物であっても自分が管理しているのだから許可を得ているものと思い込んでいる場面であると想定される。

(3)　“竹均，我的行李你怎么敢随便就取出来了。”　　＜表１-(1)再掲＞

〈竹均さん，どうして私の手荷物を勝手にとり出したんだ。〉

以下の例文も同様に捉えることができる。

＜カッコの番号は，表１の番号＞
(2)　他进屋取了两三把雨伞。……＜大辞典＞
〈彼は部屋に入って傘を２本とってきた。〉……＜大辞典＞
(3)　(小王) 去　车站　取　行李。……＜活用辞典＞
（王さんは）駅へ荷物を取りに行く。……＜活用辞典＞
(4)　他去仓库取鱼。……＜作例＞
〈彼は魚をとりに倉庫へ行く。〉……＜筆者訳＞
(5)　取样检查。……＜中日＞
〈見本を抜き取って検査する。〉……＜中日＞
(21)　这件事你打算取什么态度。……＜活用辞典＞
〈この事で，あなたはどんな態度をとるつもりですか。〉……＜活用辞典＞

B：対象を「所有領域に移す（わがものにする）」ことを表す。

次に，非わがものである（非自己領域にある）対象を所有領域に移す用例を見ていく。

(4)　按劳取酬。　　＜表１-(15)再掲＞

〈労働に応じて給料をもらう。〉

(5) 我考过了，明天去取驾照。 ＜表１-(7)再掲＞

〈わたしは試験に合格したから，明日運転免許証をとりに行く。〉

(6) 到先进单位取经。 ＜表１-(34)再掲＞

〈先進的な部門へ行って良い経験をしてくる。〉

(7) （统治者）在农民身上加倍取偿。 ＜表１-(16)再掲＞

〈（統治者は）農民から倍の補償を取る。〉

(8) 围坐在火炉旁边取暖。 ＜表１-(14)再掲＞

〈ストーブのそばにくるま座になって暖をとる。〉

(4)(5)は，「労働に応じて」「試験に合格したから」などの理由があり，「対象を必ず主体側に移せるところ」から「給料」「運転免許証」をわがものにする（＝もらう）ことを表している。また(6)における「経（jing)」は，「良い経験・良い学び」を表す。「取经」は，その部門の許可を得て学びに行っているなど，「取（qu)」を用いることによって「良い経験・良い学び」は必ずもって帰れる状況であることを示している。さらに言えば，もち帰った「良い経験・良い学び」は，その後利用／活用するのが通常であり，この点において，「取(qu)」はこのニュアンスをよく伝えていると言えるであろう。「到先进单位学经。」と「学（xue)」で表すことも可能であるが，上でも述べたように，「学（xue)」は相手から「良い経験・良い学び」を得たことしか表さずニュアンスが異なる。同様に(7)の「取偿」は，統治者が何らかの補償として統治する農民から倍以上の米，麦などの農産物を自分側に移すことを表している。統治される農民は統治者の指示に従わなければならないわけだから，「補償」(対象）は必ず主体側に移せるところにあることになる。また当然のことながら，統治者が補償としてわがものにしたその米・麦はその後利用／活用することが含意されていることから，「取(qu)」が用いられると言えるだろう。また(8)も，火をつけているストーブのそばいると「暖（nuan)」が得られることから，ストーブの「暖」は，必ず主体側に移せるところにある。ここでの「取（qu)」も，「暖」を好んで自分のところに引き寄せ，「体を温める」（利用／活用する）ことまでを含意している。この点を図示すると，図８のようになる。図９では「移動α」と「所有領域」を太線で表し，「利用／活用βを」を破線で表している。

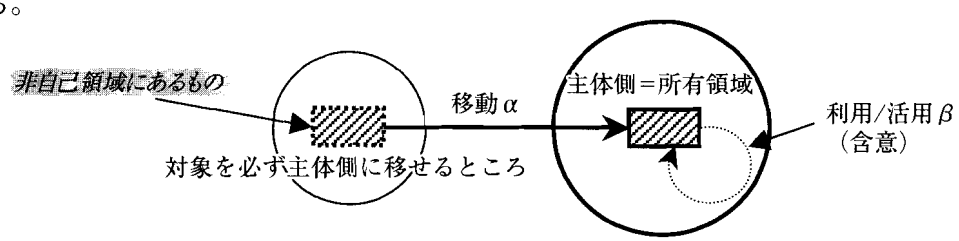

図９ (4)(5)(6)(7)(8)のイメージ図式

この他，次の例も同様に解釈できる。

＜カッコの番号は，表１の番号＞	
(10) 取之于民，用之于民。	＜中日＞
〈人民から取ったものは，人民のために使う。〉	＜中日＞
(18) 取信于人。	＜中日＞
〈人の信用を得る。〉	＜中日＞
(19) 明天足球比赛，辽宁队对上海队，你看谁能取胜？	＜汉语大＞
〈明日のサッカーの試合は遼寧チーム対上海チームだけど，どちらが勝つと思うか。〉	＜筆者訳＞
(20) 他们实力雄厚，和他们比赛很难取胜。	＜大辞典＞
〈彼らは実力が十分あるから，彼らと試合をしても勝利を得ることは難しい。〉	＜大辞典＞
(32) 今天从你们这取了不少经，太感谢了。	＜大辞典＞
〈今日は皆様方からいろいろ学ぶことができて，本当にありがとうございます。〉	＜大辞典＞

Ｃ：対象を「扱えるところに移して，扱う」ことを表す。

以下の例は，非自己領域にある対象を主体側に移して，それを扱うことを表している。

(9) 这本小说取材于钢铁工人的生活。 ＜表１-(28)再掲＞

〈この小説は鉄鋼労働者の生活を題材にとった。〉

(10) 给孩子取个名字。 ＜表１-(22)再掲＞

〈子どもに名前をつける。〉

(9)は，調べた内容から「鉄功労働者の生活」を題材とするだけでなく，小説を書くことまでを表している。因みに，日本語の「取材」に当たる中国語訳は「采访（caifang)」であり，中国語の「取材（qucai)」は，日本語の「取材」と異なる意味をもつ。(10)は，赤ちゃんが生まれると，親がいくつかの漢字の組み合わせを考え，その中から一つをとり，名前として赤ちゃんにつけることを表す。ここでは，いくつかの漢字の組み合わせを考えることやそれを選びとることより，その手に入れた漢字の組み合わせをわが子の名前として活用するという意味として解釈される。従って，(9)(10)は「利用／活用β」が前景化（実線で表示）したイメージ図式（図10）として描くことができる。

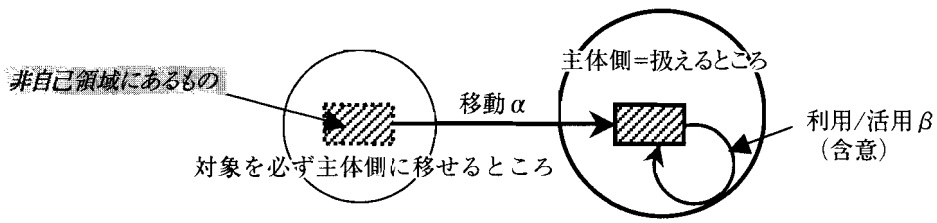

図10　(9)(10)のイメージ図式

この他，次の例も同様に解釈される。

＜カッコの番号は，表1の番号＞

(24)　衣服的长短可照老样取齐。……＜大辞典＞
〈服の寸法は古い型に合わせて結構です。〉……＜大辞典＞

(25)　下午三时我们在门口取齐，一块出发。……＜大辞典＞
〈午後3時我々は入り口に集合して，一緒に出発する。〉……＜大辞典＞

(26)　聪明的人更会取巧。……＜大辞典＞
〈利口な人ならもっと要領よくやるだろう。〉……＜大辞典＞

(27)　新老干部互相学习，互相帮助，取长补短，共同进步。……＜大辞典＞
〈新旧幹部は互いに学び，互いに助け合って長所を取り入れて進歩する。〉……＜大辞典＞

(30)　取道武汉，前往广州。……＜大辞典＞
〈武漢を経由して広州に行く。〉……＜大辞典＞

(36)　不无可取之处。……＜中日＞
〈多少取り柄はある。〉……＜中日＞

(41)　犯人如患重病，可以准许取保回家医治。……＜大辞典＞
〈犯人がもし重病にかかったら，保証人をたて家で治療することが許される。〉……＜大辞典＞

(42)　叫他三人每人拿出一万块洋钱充作罚款，就将他们取保出去。……＜大辞典＞
〈彼ら3人にそれぞれ1万‘元’ずつ罰金を出させて，（それを保証にとって）保釈しろ。〉……＜大辞典＞

(43)　广泛取证。……＜中日＞
〈広く証拠を集める。〉……＜中日＞

ところで，上で挙げた「Ⅰ」のA，B，Cの用例群は，利用／活用することが含意されている用例群であった。しかし「取（qu)」は「災禍・滅亡」のように利用／活用することのできない対象，また「暖・楽しむこと」のように好んで自分のものにする対象などとも共起し，移した後に利用／活用することは含意されていない用例もある。以下では，このような用例について触れたい。

Ⅱ．～して，ある状況（災禍・楽しみなど）を自らのものにする用法

(11)（他）因称颂海瑞和东林党而取祸。　＜表1-(11)再掲＞
〈（彼は）海瑞と東林党を称賛したために災禍に遭った。〉

(12)　大家坐在一起说笑话取乐。　＜表1-(39)再掲＞
〈みんなで一緒に座って，冗談を言って楽しむ。〉

(11)の対象である「災禍」は自然災禍でなく人為的な災禍である。この例はどのように考えればよいのだろうか。その当時，時の統治者は海瑞と東林党の主張に反対しており，海瑞と東林党を称賛する人は必ず迫害されるということが周知の事実であった。(12)は，災禍に遭うことを知っていて称賛したのだから必然的にそのような状況になることは分かっており，この点を踏まえれば，必ず主体側に移せるところから自ら災禍を自分側に移したというように「取（qu)」の意味を解釈することができる。(12)の「取乐」は，(11)の「取祸」

とは異なり，好ましい状況を自らのものにする用例である。この用法の「取（qu）」は，主体がその状況（災禍・楽しみなど）を求め，その状況を自らのものにすることを表しており，主体側に移した後に，その状況を利用／活用することは含意されない。⑾⑿は「利用／活用β」は消滅したイメージ図式（図11）として描くことができる。

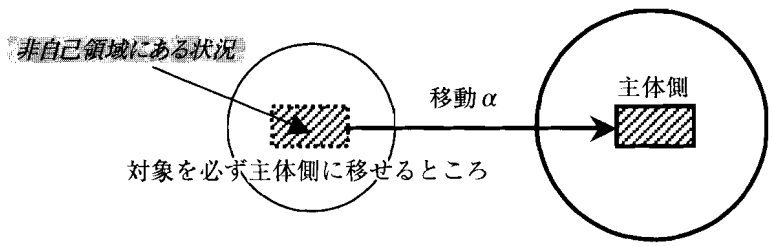

図11　⑾⑿のイメージ図式

この他，以下の例文も同様に解釈できると考えられる。

＜カッコの番号は，表1の番号＞
⑿　他的这个下场，说来乃是咎由自取。……＜中日＞
〈彼のこの成れの果ては，言うなれば身から出たさびだ。〉……＜中日＞
⑿　（他这样做）简直是自取灭亡。……＜中日＞
〈（彼がこのようなやり方をするのは）まるで自ら滅亡を招くようなものだ。〉……＜中日＞
㊳　下棋取乐。……＜大辞典＞
〈将棋をして楽しむ。〉……＜大辞典＞

以上に示したように，コア図式を通すことによって，錯綜した概念の集積である「取（qu）」の意味空間は一つのイメージに取りまとめて理解することが可能になる。

7．日本語動詞「とる」の意味空間

本稿の研究課題は，異文化理解を射程に入れた語彙指導の可能性を探る一観点として「ことばの意味空間」に着目し，中国語動詞「取（qu）」で表される意味空間を日本語動詞「とる」との比較から考察することである。それでは,「とる」の意味空間はどのように捉えられているのであろうか。「コア図式論」を用いた「とる」の意味空間分析はすでに松田（2006）があるので，本稿では松田（2006）を参考にする。

認知意味論では，あることばにさまざまな漢字が当てられる場合，これらは何らかのつながりをもつ一つの語のバリエーションであると考える。例えば「とる」は，「取る，採る，捕る，撮る，獲る，摂る，執る」などさまざまな漢字が当てられるが，音声言語ではすべて「toru」として習得され，国語辞典でも一つ見出し語として記述されて，それぞれの漢字で表される意味は当該の見出し語の多義（文脈により生じる意味）として扱われていることから，これらは何らかのつながりをもつ一つの語のバリエーションであると考えるのである。認知意味論の一つのアプローチである「コア図式論」よる分析もこの立場をとる。

松田（2006）では,『大辞林　第二版』に挙げられた「とる」の項目10用法73項目を分析した結果から,「とる」は，①「元あるところ」から対象を移動させ，②それを手中に移し，さらに③それを意図に適うように扱うこともあるという行程を表すとして，図12のようなコア図式が仮設されている。

「とる」＝元ある場所・状況（移動元）から，対象を主体のコントロール可能領域（＝移動先）に移し，それを意図・状況に適うように扱うこと。

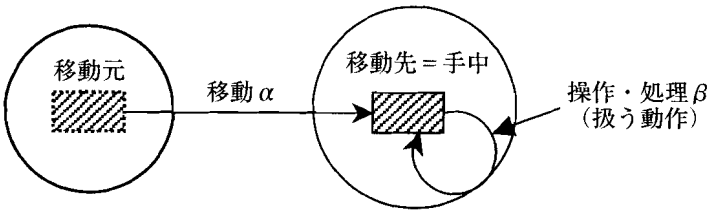

図12　「とる」のコア図式（松田，2006）

コア図式の「移動先」である「手中」は，主体が「対象を扱えるところ／利用できるところ」という意味の「手中」であり，「どこか別の場所」のこともあるし，「自己の所有領域」のこともある。「移動α」とは，

何らかの手段で「対象を移す」ことである。「操作・処理β」は，対象を「状況に適うように調整する／操る／処理する」などの「扱う動作」，あるいは「活用する／利用する」というようなことばで表される行為を総括して表すものであるとする。

そして，「とる」の多義用法を便宜上次の以下の６用法に分析し，これらの用法の概念イメージはそれぞれ違うように見えるが，それはものの見え方が角度によって異なるように，図12の「移動元，移動α，移動先，操作・処理β」のいずれの部分に認知的焦点を当てるかの違いであると説明している。

A：対象を「元ある場所（移動元）からなくする」ことに焦点がある用法
　例）眼鏡をとって，あいさつする。／箱の蓋をとって，中身を確認する。
B：対象を「別の場所に移す」ことに焦点がある用法
　例）大皿のサラダを小皿にとる。／おやつを半分とっておく。
C：対象を「所有領域に移す（わがものにする）」ことに焦点がある用法
　例）人のカバンから財布をとる。／夏休みに免許をとる。／暖をとる。
D：対象を「扱えるところに移す」ことに焦点がある用法
　例）クリーニング店に預けた服をとりに行く。（元々自分のもの）
　　川で魚をとる。／花見の席をとりにいこう。／手相占いが客の手をとる。
E：対象を「扱えるところに移して，扱う」ことに焦点がある用法
　例）この絵は史実に題材をとった作品だ。／この提案はとるべき唯一の方策だ。
F：対象を「扱う」ことに焦点がある用法
　例）彼は嵐の中で必死に船の舵をとる。／うまくバランスをとりながら，丸太橋を渡る。

例えば，Aの元ある場所から対象を別のところに移すという意味を表す「帽子をとって，あいさつする」，「箱の蓋をとって，中身を確認する」などは，元あるところから対象がなくなるという「移動元」の部分が焦点化した（＝認知的力点が置かれた）図式として表すことができ，この場合「移動先＝手中」および「操作・処理β」の部分には認知的焦点は置かれない。またCの対象を「わがものにする」という意識が強くなる「人のカバンから財布をとる」，「夏休みに免許をとる」などは，対象の元ある場所である「移動元」や対象の移動を表す「移動α」には認知的焦点は置かれず，対象をわがものにするという「移動先＝手中」の部分に認知的焦点が置かれているため，「移動先＝手中」が焦点化した図式として表すことができる。さらに「とる」の用法には，Fのように「舵をとる」（＝対象を手にもって扱う），「バランスをとる（＝バランスを扱う）や「事務／政務をとる，指揮をとる」（＝対象をその手で運用する）などの用法があるが，これらは対象を扱えるところである手中に心理的移動をさせた後，それを主体の意図・状況に適うように扱うという部分に認知的焦点が置かれた用法であり，これらの用法はコア図式の「操作・処理β」の部分が焦点化した図式として表すことができるとする（松田，2006参照）。

このように，それぞれの用法の概念イメージをコア図式のバリエーションとして描くことにより，「とる」の多義用法は一つの認知図式に取りまとめて統一的に理解できることを示している。

8．中国語動詞「取（qu）」と日本語動詞「とる」の意味空間比較

７節と８節から，「取（qu）」と「とる」の意味空間を以下のようなコア及びコア図式として，取りまとめることができる。

「取（qu）」＝対象を，元あるところ（＝必ず主体側に移せるところ）から，利用/活用するために主体の扱えるところに移すこと。

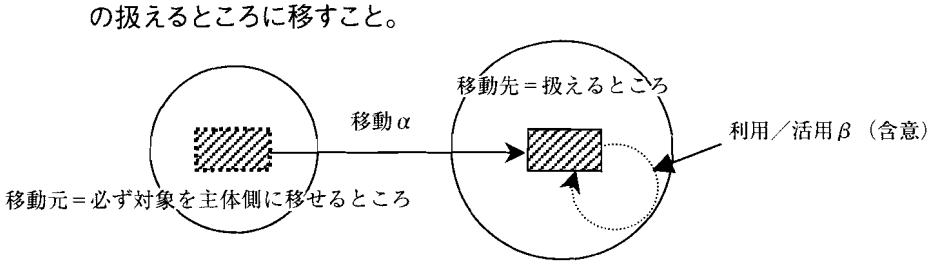

図13　「取（qu）」のコア図式

また，「取（qu）」と「とる」との共通点と相違点は，次のようにまとめられる。

「とる」＝対象を，元あるところから，利用／活用するために主体の扱えるところに移し，場合によっては意図に適うように対象を扱う（操作・処理など）こと。

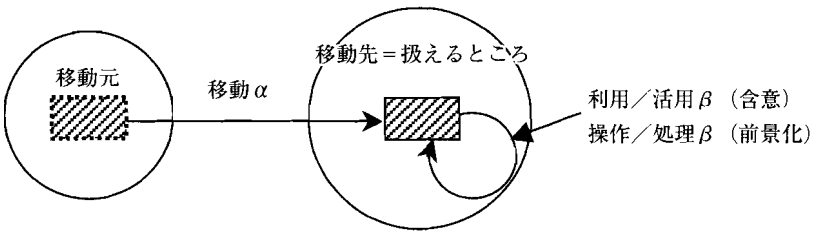

図14 「とる」のコア図式

＜共通点A＞

A-(1) いずれも「対象を扱えるところ（手中・主体側・身近）に移す」ことを表す。

A-(2) また「対象を移した後，意図／状況に適うように扱う」という意味を含意する。

＜相違点B＞

B-(1)「取（qu）」は，移動元が「必ず主体側に移せるところ」というように限定される。

B-(2)「とる」は，「舵をとる」のように，対象を扱えるところに移した後で意図に適うように対象を扱う動作までも表現する。「取（qu）」は，利用／活用することが含意されるだけである。

B-(3)「取（qu）」は「ある状況」も対象にとるが，その場合利用／活用することは意識されない。

9．おわりに

本稿では，異文化理解を射程に入れた語彙指導の可能性に向けての基礎研究としてことばの≪分節機能≫に着目し，≪分節機能≫の違いを具体的にはどのよう記述･説明すれば分かりやすいかを中国語基本動詞「取（qu）」を事例として記述した。

上で述べたように，それぞれの言語文化によって世界（現象・事態・状況）の分節の仕方が異なるということは，個々の事例では誰でも経験することである。しかし，それは対訳を通して個々の事例を理解しているに過ぎず，異文化理解という視点に立つとき，対訳を通しただけでは十分に理解したとは言いがたい。例えば『中日辞典』で中国語の「取（qu）」を引くと，その一つに「モノの元ある場所からとる」という意味が挙げられ，「到洗衣店去取衣服。＜クリーニング店に服をとりに行く。＞」という例が挙げられている（例文／訳文とも『中日辞典』）。本稿の分析で考えると，「取（qu）」のコアは＜主体側に必ず移せるところから，対象を主体側に移す＞というものであり，日本語「とる」のように単に＜モノの元あるところから対象を主体側に移す＞のではない。このことから「到洗衣店去取衣服。」は，正確には日本語の対訳「とる」とは異なる事態把握の仕方で表現していることになる。この点はことばの意味空間をコアのレベルで理解するにより見えてくるものである。

「同じ形には共通の意味がある」というのがコア・アプローチの前提であるが，「取（qu）」の意味空間をコアのレベルで理解することにより，中国語の「取（qu）」は日本語の対訳「とる」とは全く異なる切り取り方で世界を切り取っていることが分かる。そして，日本語母語者は「取（qu）」のコアを通すことで，「クリーニング店に服を取りに行く。」と同じように「銀行でお金を下ろす／引き出す」ことを「取（qu）」で表すのも，＜必ず手中に移せるところから＞という意識を同じくするためであると了解することができ，日本語訳にとらわれることなくこれらの用法が理解できるようになるのではないだろうか（図15）。

また，コアを介在させて用例を結びつけることにより，日本語では「＊（銀行で）お金をとる」とは表現せず，「お金を下ろす／引き出す」と表現するのはなぜだろうかと考えるきっかけにもなる。そして，日本語ではお金は大事なところにしまっておくものというように事態を捉えるためであり，大事なところとは，「高いところ」や「奥まったところ」だと捉えていることを，「お金を下ろす」や「お金を引き出す」という表現から了解するであろう。このように，両言語をコアを介在させて理解をすれば，他の言語文化における事態の把握の仕方を知るだけでなく，自言語文化のそれをも知ることができる可能性が拓ける。それは，異文化相互理解を射程に入れた新しい語彙教育の可能性につながるものと考える。

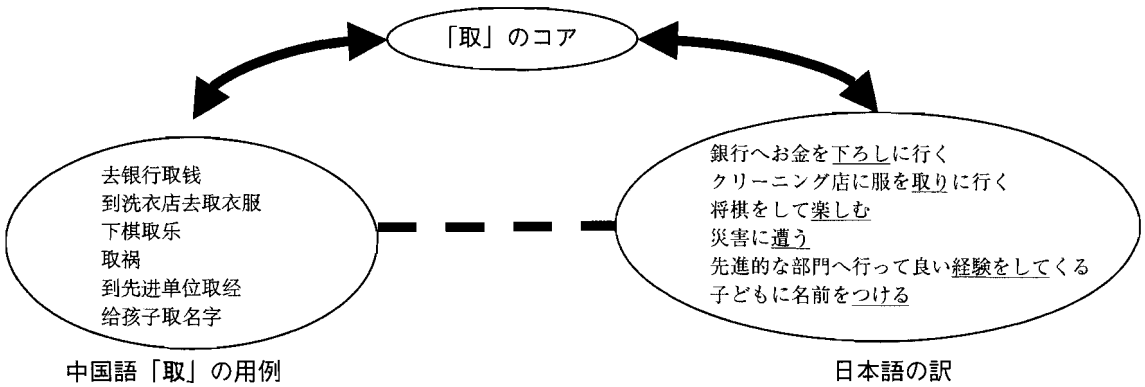

図15　コアを媒介にした中国語と日本語の関係（田中, 2004:11 を参考にして筆者作成）

冒頭で述べた溝上他（2009）のあらゆる言語はその言語の話者の精神生活や文化の投影であり，異なる言語文化におけることばの意味は，新たな発想や異なった思考世界の捉え方の存在を実感する文化的気づきの場を提供してくれるとする指摘に戻るなら，コアを介在させた外国語語彙学習は，こうした文化的気づきを促進する学習ツールの一つとなりうるのではないだろうか。

しかしながら，本稿はその一分析事例を示したにすぎない。コアを併記した意味記述を文化的気づきを促進する語彙学習ツールの一つとして位置づけるためには，他の基本動詞についても同様の方法で分析・記述を進めていく必要がある。今後の課題としたい。

注

(1)「基本動詞」とは，英語では“take, get, have”，日本語では「とる，かける，つける」，また中国語では「取（qu），拿（na），分（fen）」など日常的によく使われる動詞を指す用語である。

(2)「言語記号論」という呼び方は，ソシュールが「言語は記号の体系である」と考えたことによる。

(3)日本語のみ，また英語のみというように単一言語を見ている限りにおいては，このように考えても全く差し支えない。

(4)本稿では，シニフィアンを「表現」，シニフィエを「意味・概念」とする訳を用いることにする。

(5)佐藤の図では表現と意味・概念の関係が図１とは異なり横に並べられている。これは記号体系と現実世界とを左右に配して見るためであると佐藤（1996：124）は述べている。

(6)「ラング」の意味で用いている。以下同様。

(7)田中，松田では「ことばの意味空間」と記されているため，本稿でもそれに倣うことにする。

参考文献

黄一君（2010）「ことばの意味空間から捉えた異文化理解に関する一考察」平成21年度岡山大学大学院教育学研究科　修士論文（未公刊）

佐藤信夫（1996）『レトリックの意味論』講談社

柴田武編（1976）『ことばの意味１－辞書に書いてないこと』平凡社

田中茂範（1987）『基本動詞の意味論―コアとプロトタイプ―』三友社出版

田中茂範（1990）『認知意味論―英語動詞の多義の構造―』三友社出版

田中茂範他（2003）『Ｅゲイト英和辞典』ベネッセ・コーポレーション

田中茂範（2004）「基本語の意味のとり方―基本動詞におけるコア理論の有効性―」『日本語教育』121号，pp.3-13.

松田文子（2002）「認知意味論的アプローチによる複合動詞の意味と習得の研究」平成14年度お茶の水女子大学大学院人間文化研究科　博士論文

松田文子（2004）『日本語複合動詞の習得研究―認知意味論による意味分析を通して―』ひつじ書房

松田文子（2006）「コア図式を用いた多義動詞「とる」の認知意味論的説明」『日本語科学』19号，国立国語研究所．pp.119-132.

松田文子・白石知代（2007）『日本語複合動詞の習得研究：認知意味論を基盤とする日本語学習者習得支援

への提案―コア図式を併記した学習辞典のための基礎研究―』平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究成果報告書
丸山圭三郎（1981）『ソシュールの思想』岩波書店
丸山圭三郎（2001）『言葉とは何か』夏目書房
溝上由紀・柴田昇（2009）「『異文化理解』と外国語教育――教養教育の一形態として――」『愛知江南短期大学紀要』38号, pp.31-42.
Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. London: Longman.

参考辞典

『大辞林　第三版』（2006）（松村明 編）三省堂書店
『现代汉语大词典』（2000）（现代汉语大词典编委会 編）汉语大词典出版社
『现代汉语词典』（1996）（中国社会科学院语言研究所词典编辑室 編）商务印书馆
『中国語大辞典』（1994）（香坂順一 編）角川書店
『中国語動詞活用辞典』（1993）（王硯農・焦ホウグウ・林芳 著）東方書店
『日中辞典』（1987）（北京対外経済貿易大学／北京商務印書館／小学館 共同編集）小学館